ポストパンデミックの世界構築

―テイヤールの思想に学ぶ、「生命」の自覚を基盤とした世界構築の可能性―

B2035072 横濱佑三子（よこはまゆみこ）
実践宗教学研究科死生学専攻 博士前期課程 2 年

【要約】

「生命」の自覚とは、私もあなたも生きていて、いずれ死ぬという実感であり、それを、われわれはパンデミックの状況下において、感じざるを得なかったのではないかと考えた。テイヤール・ド・シャルダンの著作のひとつに、『自然における人間の位置』があり、これは、「人間は生命の一部である」との言葉で始まる。生命の進化の歴史を見たときに、人間は「思考のしきい」を越えて、進化の方向を具現化したとされる。

本論文では、ポストパンデミックにおける現代社会において、「生命」とは何かを考え、それを守るために何ができるのかを、テイヤールの思想から学ぶことを試みた。具体的には、現代社会における「生命」を守るという理念をもった取り組みのひとつとして SDGs を挙げ、理念に基づいた「目標」に向けた「行動」という構造があることを確認した。その上で、異なる信仰・信条をもつ立場で、「目標」に向かって協働しなければならないときに、何ができるのかを考えた。テイヤールは、進化論において「オメガ点」の概念を提示している。これは、多数の人間の「合流点」と一致するものであり、合一化させるものではない。つまり、個人が自己を保ちながら、一つの点において一致することを示す。そして、この「オメガ点」は超越的なものであり、「進化を前に進める原動力」であるとも説明される。

これらのことから、人間は生命であるという前提を根本理念としてもつことによって、われわれは一致できると考えた。そして、行動の指針となる信仰・信条が異なる場合においては、「思考のしきい」を越えた人間がもつ思考力を用いて模索することで、生命が守られる世界構築に向けて、協働できる可能性があると結論づけた。

1. はじめに

ポストパンデミックの世界構築について、「生命」とは何かをもとに考えたい。それは、パンデミックでわれわれが立ち会った局面のひとつに、「死」があると考えられるためである。日常的に、死が身近に感じられたこと、そして、「生命」の問題と社会の取り組みが密接な関係をもつと気づかされたのが、パンデミックの状況下だったのではないか。

本論文では、テイヤールの進化論を参照しながら、ポストパンデミックのいま、パンデミック禍に得た実感から、どのように世界を構築できるのかを考える。具体的には、テイヤールの思想でも触れられる「個人」と「社会」の観点と、「生命」を守ることを理念とした「目標」の設定、それに向けた行動において、どのような難しさがあり、また、それをどのように乗り越えていけるのか、である。これらについて、テイヤールの進化論の思想から、現代社会における思考の可能性を考えたい。

1-1. 「生命」における生と死

コロナウイルス感染症による死者数は、現在、1 万 8 千人を超えている[1]。これは東日本大震災における死者数と同程度である。初めて武漢で新型コロナウイルスが確認された 2019 年 12 月から、約 2 年もの間、罹患者・死者が出続けていることの深刻さがうかがえる。

このような状況下で意識せざるをえなかったのが、自分自身の「生命」なのではないか。言い換えると、いま私は生きているけれど、いつかは死ぬという実感である。フランスの哲学者に、「死」について洞察したウラジーミル・ジャンケレヴィッチがいる。彼は、「死の人称」の理論[2]において、死を一人称・二人称・三人称に分けて思考した。これらはそれぞれ、私・あなた・彼（彼女）らの死と言い換えられる。特に、「三人称（彼（彼女）ら）の死」は、「死一般、抽象的で無名な死」とされる。しかし、これは私に無関係な死ではなく、これらの人称の死は、相互に他の死を照らす。例えば、「一人称（私）の死」を基点に考えてみると、私の死は本質的に経験しえない。しかし、私以外の誰かの死（二人称・三人称の死）は確認できる。これによって、他者の死から、「死」が実感される。ジャンケレヴィッチは、「それは単に、死の脅威を実際のもの、身近なものとして生きるというだけではなく、そのことによって自分自身、身をもってこの脅威に関連していると感ずることだ」[3]という。

報道によって見聞きした死は、この「三人称の死」に分類されるだろう。つまり、日常生活の中で触れた他者の死は、自分自身の死を照らすものでもある。その時に何を思うか。ポストパンデミックのいま、私たちそれぞれが実感した「死」によって、いまある「生命」とは何か、また、

---

[1] 厚生労働省「死亡者数（累計）」、「国内の発生状況」（URL：https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html　閲覧日：2021 年 12 月 5 日）。

[2] ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ『死』、仲沢紀雄訳、東京：みすず書房、1978 年、24-36 頁。

[3] ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ『死』、仲沢紀雄訳、東京：みすず書房、1978 年、20 頁。

それを守るとは何かを考えることが、求められるのではないか。

2. 「生命」を守るための行動と目標　――個人と社会の関係

2-1. 『自然における人間の位置』におけるテイヤールの思想

①　生命の歴史

『自然における人間の位置』は、「人間は生命の一部である」(16 頁)[4]との言葉で始まる。テイヤールは、人間は生命の中でも、「もっとも特徴的で、もっとも重要な極にあり、もっとも生き生きとした部分」(16 頁)との視点から、宇宙における生命の位置を明確にすることを通して、世界における人間の位置を評価することを試みている。

テイヤールは「世界」を、「生物圏」と「精神圏」において説明した。特に「精神圏」において、人間の出現が重要な役割を果たしたことを主張する。

> 生命の歴史においてはじめて、それは何枚かの孤立した葉ではなく、一つの系列、偏在する一つの系列全体が、一挙にそして一丸となって、全体化してゆく様子を見せるのである。人間は単に一つの種として出現した。けれど、人種的-社会的合一のはたらきによって、この地球の特異的に新しい被覆の地位に高められていった。(中略) それはまさに一つの《圏》(sphère)、――生物圏と同じ広がりをもってその上をおおう(しかし、それよりはるかによく結合し、かつ均一であることか!)『精神圏』(あるいは思考する圏)に他ならないのだ。(91-92 頁)

「人種的-社会的合一のはたらき」とは、「本能的な生命から思考への移行」(81 頁)によってもたらされたものであり、人間は他の生物と同様に「生命」でありながら、「思考力」によって、進化を新たにしていくものだということである。

②　社会化の過程

テイヤールは、「精神的『思考』(réflexion psychique)」(70 頁)を、社会化において説明することを試み、人間の進化を「膨張による社会化」と膨張が転じた「圧縮による社会化」の二期に

---

[4] テキストは、テイヤール・ド・シャルダン「自然における人間の位置」(『テイヤール・ド・シャルダン著作集 2 自然における人間の位置/人間のエネルギー』所収、日高敏隆・高橋三義訳、東京:みすず書房、1972 年)を使用し、引用する際には本文中にページ数を示す。

分けた。膨張期においては、文化が築かれ人間は分化し、その「個人化」が進むことによって、隔離・孤立していくしかないという人間化の最後の段階にきてしまったのではないか、という見方がされる。しかし、テイヤールはこの見方を、「個人化」も同時に起こったようにみえただけだと指摘する。つまり、個人の分離は一時的に映し出された地平であり、「全体化」がやがてやってくることを主張する。加えて、この「全体化」は「個人」としての人間を否定するものではないという。この見方において、人間を「(前略) できるだけ大きい軌跡の上に置きなおしてみることが、本質的な問題」(115 頁) であるとし、「巻き込みの途上にある宇宙」を提示する。つまり、個人化は進化の終点ではなく、宇宙というより大きな視点から人間を見下ろすことで、人間をいまなお発展のさなかにあると位置づけている (127 頁)。

テイヤールは、さらにこの論を進めて、人間の全体化は人類生成の帰結であり、それは社会化の膨張期における個体化を経て起こるものだと述べる。しかし、それが終着なのではなく、収斂期における人間化において「人格化」が見出される。それは「われわれ一人一人の究極の中心、それは孤立、放散した軌道の末にあるのではなく、自由意志によって自己自体に手を差しのべ、思考し、合一する多数の人間の合流点と、(混ざりあうのでなく) 一致するのである」(130-131 頁) と説明される。つまり、個人としての自己が合一化によって失われることはなく、それぞれが自己を保ちながら合流する。それが、未来へと向かって進化を続ける人間の向かうところである、ということだと考えられる。

2-2. パンデミック禍の「生政治」の雰囲気

『自然における人間の位置』においてテイヤールがたびたび言及するのが、上述の、個人としての自己が、人間が全体化へと進むことによって失われるかもしれないという本質的な恐怖である。それは、「(前略) われわれのささやかな《自己》という思惟の貴重な火花が、すでにその前触れが見えているこの変革の途上で失われてしまうのではないかという怖れである」(114 頁) と書かれている。

パンデミックの最中には、同様の恐怖が感じられたのではないか。その一例が、諸外国で行われたロックダウン (都市封鎖) である。勿論、パンデミック対策として必要性が吟味された上で行われたはずである。しかし、行動を規制されることの閉塞感、あるいは、個人としの自分の自由意志が剥奪されるのではないかという、ささやかな危機感を抱いた可能性は否定しきれない。

医療社会学者の美馬達哉は、治療法が確立されていない感染症の予防に関して、「人口の生政治という点からは、『感染源』とみなされた感染者を隔離・検疫して『社会防衛』することが目的となる。そのとき、個人の幸福や健康という価値は、かけがえのない質的なものとしてではなく計算可能な数値として扱われ、ある生政治的な介入によって集団の得る合計としての価値と個人の得る価値や損害の間で比較が行われる」[5]と説明する。繰り返しになるが、テイヤールが、

[5] 美馬達哉『感染症社会―アフターコロナの生政治』、京都：人文書院、2020 年、170-171 頁。

個の尊重が失われることを恐れていることを指摘しているように、現代においても、個は強く意識されるものである。しかし、テイヤールは、社会化においても個別化が失われることはなく、自由意志に基づいて思考し「合流点」において一致することを示す。これらを併せて、パンデミックの状況下における個人と社会の関係を考えると、個人が何かに従う・手放すという姿勢ではなく、「合流点」をもつことが意識されるのが重要なのではないか。

2-3. SDGs（Sustainable Development Goals）にみる「目標」の共有

実際的な「合流点」的なものとして、現代の社会の取り組みを見たときに、SDGs が機能しているひとつの点としてあるのではないか。SDGs とは、「持続可能な開発目標」である。詳しくは、「『誰一人取り残さない』持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030 年を年限とする 17 の国際目標」[6]である。また、この目標に対する「SDGs アクションプラン 2021」には、「Ⅰ. 感染症対策と次なる危機への備え」が含まれており、このアクションプランにおける目標に先立つ根本理念は、「生命」が守られることである。また、パンデミックが世界規模であることから、多国間主義の下の協働と連帯が不可欠であるとの姿勢が示されている。

国際政治学者の小川裕子は、SDGs の「目標による統治」という構造に注目し、「『目標による統治』という構造をとる SDGs は、世界各国が SDGs 達成に向けた取り組みに着手し、励んでいる状況を見る限り、現時点では、十分ではないかもしれないが、その実効性を確保しているといえる」[7]と述べている。つまり、行動の指針として、合意形成のできる「目標」を共有することで、各々の活動を通して協働するということはできる。

ここで確認したかったのは、現代社会における地球規模の取り組みにおいても、「生命」が最も基本的な守られるべきものとして認識されていることである。そして、「生命」を守るという理念にむかって、具体的な目標が立てられ、それを共有することによって行動が起こされているという構造がみられることである。

3. 世界構築のための信念と模索　――テイヤールの進化論への批判から

しかし、「目標」の達成に向けた行動をともに行っていくのは、容易にできることなのだろうか。2-2. で触れたように、ある価値が優先されるときに、もう一方は制約を強いられるという可能性もある。これについて、テイヤールの思想における批判を通して、信念の対立が起こった場合に、どのように克服・軽減に向けて動くことができるのかを考えたい。

---

[6] 外務省国際協力局地球規模課題総括課「持続可能な開発目標（SDGs）達成に向けて日本が果たす役割」、（URL：https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/sdgs_gaiyou_202108.pdf　閲覧日：2021 年 12 月 5 日）。

[7] 小川裕子「目標による統治は可能か？：SDGs の実効性と課題」『国連研究第 22 号 持続可能な開発目標と国連―SDGs の進捗と課題』所収、日本国際連合学会編、東京：国際書院、2021 年、73 頁。

3-1. テイヤールの進化論への批判

テイヤールの思索の総合的な成果として発表されたのが『現象としての人間』である。テイヤールは、地質学者・古生物学者であり、カトリックの司祭でもあった。その専門性の豊かさが、テイヤールの進化論にみてとれる。テイヤールの著作を多数翻訳した美田稔は、「多くの場合、なんの共通性もなく、越えることのできない壁にへだてられていると考えられる科学と信仰という二つの世界が、テイヤールにおいてはきびしい葛藤の末にみごとな調和に達し、学問と生活との生きた統一体に高められ躍動している」[8]と『現象としての人間』を評している。

しかし、ダイナミックでユニークな思想であるからこそ、批判もあった。ひとつは、科学的な正しさが重視された場合の批判である。例えば、「宇宙全体の進化が向かっている方向」[9]である「オメガ点」は、「科学的に立証された事実によって証明されない」[10]ということである。科学的にテイヤールの思想の正しさを証明できないからといって、テイヤールの思想が誤りであるとはいえないが、テイヤールの思想を読む者の立場によっては、疑問が抱かれるのは確かであろう。ふたつめに、『現象としての人間』におけるテイヤールの進化論が、カトリック教会内の一部から批判されたという事実がある。

このように、それぞれがなにを真とするか、その信念によって、批判を受けたという経緯がある。これは、テイヤールの著作に限ることではなく、大なり小なり、他者と共に生きる上では起こりうる問題である。これは、本当に、ひとつの「目標」に向かって、ともに行動するということができるのか、という問いにつながるのではないか。

3-2. 現代日本社会に照らして

これを具体的に考えていくために、前項で挙げた二つの批判の観点から、テイヤールの進化論と現代日本社会を照らし合わせてみたい。

① 「生命」を考えるうえでの超越性

いまを生きる人々、個々人の生活の観点でいえば、テイヤールの進化論の大胆さこそが、ひとつの道標となるのではないかと考える。

テイヤールが示しているのは、「進化を前に進める原動力」としての「オメガ点」である。つまりは、「オメガ点」そのものだけが重要なのではない。「オメガ点」には現実的には到達できない。それは、「経験的プロセスの外」にあるものであり、「そこに到達するためには（いや、そこ

---

[8] 美田稔「訳者あとがき」『現象としての人間』、美田稔訳、東京：みすず書房、2011 年、400 頁。
[9] 同上、404 頁。
[10] 同上、404 頁。

に到達しようとする行為自体によって)、われわれは空間と時間から出てゆくことになる」(132頁）ためである。つまり、「オメガ点」は超越性を有するものである。だからこそ、人間の進化を促すものであり、未来へと進めていけるものであると、テイヤールは言っていると考えられる。そしてそれは、「究極まで集中しようとする世界の努力」(134 頁）であると同時に、「自らについて思考する進化」(135 頁）の支えとなるものなのではないか。

また、「生命」それ自体を「生と死」を含むものと考えたとき、それは、物質的・実際的なものだけでは観測しえず、また、「いま、ここ」だけでは認識しきれないものである。理論の科学的実証性・妥当性が確認されることも無論重要ではあるが、それと同時に哲学的ヴィジョンとして、われわれの思考を支え、前に進めるものとしての意義に目を向けられるのではないか。

② 「模索」の可能性

しかし一方で、この哲学的ヴィジョンが宗教的信念によってもたらされたということに、現代日本社会においては、近づきがたさを感じる場合もあるのではないか。

『物質の核心――わが魂の遍歴』において、テイヤールは、「実際のところ、宇宙科学の分野と生物学の分野とを探求する道を進んでいたなら、オメガ点はいつまで経っても《辛うじて》理解できる程度のものにすぎなかっただろう」[11]と言い、それは、実感されたものというより、弁証法的探求によって予想されたものであるからだと説明している。テイヤールが、「オメガ点」を自分のものとして実感したのは、「まだ部分的に人格化されたにすぎなかった《わが宇宙》が生き生きした愛の働きを生みだしながら一点に集中してしまった」[12]という宗教的体験を得たためであり、それを引き起こした「火花」は、「キリスト教神秘主義の流れを経て、私の母を通してもたらされたものにちがいない」[13]と語る。

つまり、テイヤールの進化論の思索の核心には、キリスト教者としての信仰があったといえる。そして、オメガ点の概念は、キリスト教的信仰を除外した生物学的・心理学的領域においても探求されるものだが、真に理解する、あるいは実感するには、キリストという「火」が必要であったと語られている。

しかし、現代の読者である我々がどのようにテイヤールの思想に学ぶか、と考えたときに、テイヤールと宗教的信条を一致させているかは、必ずしも問われることではない。今回試みているのは、テイヤールの思想の正しさを吟味するのではなく、テイヤールの思想から学ぶことである。つまり、自己と他者の信念の違いがあることを認めつつ、具体的に何が異なり、また、そこからどのように協働できるのかが問題になるはずである。

---

[11] テイヤール・ド・シャルダン『物質の核心――わが魂の遍歴』、美田稔訳、東京：オリエンス宗教研究所、1999 年、62 頁。

[12] 同上、63 頁。

[13] 同上、63 頁。

この時にできるのが、テイヤールが「模索」といっているところなのではないか。テイヤールは、すでに生命は進化の過程で「模索」をしてきているという。これは、次のように説明される。

> 模索ということをもっと厳密に、ふつういわれている『思考する』手さぐりという意味にとれば、それは必然的に、地球上にこえる思惟の目ざめと同じだけ古いものだということになる。とはいえ、その作用の一般的かつ意識された完全さにおいて考えてみるならば、模索は（これこそ理解すべき肝腎な点であるが）人間化というプロセスにおけるまったく最近の、そしてきわめて意味ぶかい発展なのである。（120 頁）

そして、「（前略）圧縮的社会化のもとにおかれた人類とは、何かを『見出すため』しっかり身構えた人類の同義語なのではないだろうか？」（124 頁）と提起される。つまり、それぞれが個であることは保たれつつ、集団となり相互に共同することによって、誤りが減っていくということである。この思考することこそが、人間が生物圏から精神圏へと進化させたものであり、人間において特徴的なものであるというのは、前述のとおりである。

4. おわりに　――テイヤールの思想に学ぶ、世界構築の可能性

ポストパンデミックの世界構築の基盤になるものとして、私もあなたもいずれ死にゆく者であるという「生命」の自覚を挙げた。それは、パンデミックの最中で感じられたであろう、他者の死に照らされた私の死への実感によってもたらされるものである。

現在の社会的な取り組みとして SDGs を見たように、「生命」を守るという理念を根本的なものとして共有し、世界は動き始めているようである。本論文で扱ったテイヤールの『自然における人間の位置』において、テイヤールが前提として強調しているのは、「人間は生命の一部である」（16 頁）ことである。そして、それは「何百もの異なる民族の開花、移住、衝突、（一つの民族と他民族の）交替など、多様で多彩な激動も、すべてよくよく解析してみれば、その根底においては生物の分岐という果てしなくつづく、そしてつねに同一の作用が、文明化された環境の中で継続しているのに他ならぬのでないだろうか？」（101 頁）という提起でもある。

われわれは、必ずしも行動の指針となる信仰・信条を一致させてはいないが、これは「模索」によって、前に進めることができるはずである。そして、テイヤールが人間に見出す、特有の「巻き込みと収斂の動きの核」（39 頁）は、宇宙、生命に人間を位置づけるものである。この時に、ミクロの視点ではなく、マクロの視点で物事を捉えることによって、われわれはまだ終着に至ったのではなく、未来への進化の途上であることを、テイヤールは教えてくれるのではないか。

【参考文献】

ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ『死』、仲沢紀雄訳、東京：みすず書房、1978 年。

テイヤール・ド・シャルダン『現象としての人間』、美田稔訳、東京：みすず書房、2011 年。

テイヤール・ド・シャルダン「自然における人間の位置」『テイヤール・ド・シャルダン著作集 2 自然における人間の位置/人間のエネルギー』所収、日高敏隆・高橋三義訳、東京：みすず書房、1972 年。

テイヤール・ド・シャルダン『物質の核心――わが魂の遍歴』、美田稔訳、東京：オリエンス宗教研究所、1999 年。

日本国際連合学会編『国連研究第 22 号 持続可能な開発目標と国連―SDGs の進捗と課題』、東京：国際書院、2021 年。

美馬達哉『感染症社会―アフターコロナの生政治』、京都：人文書院、2020 年。